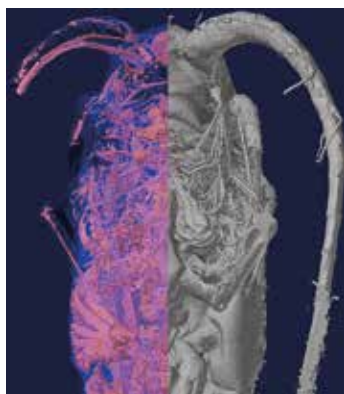
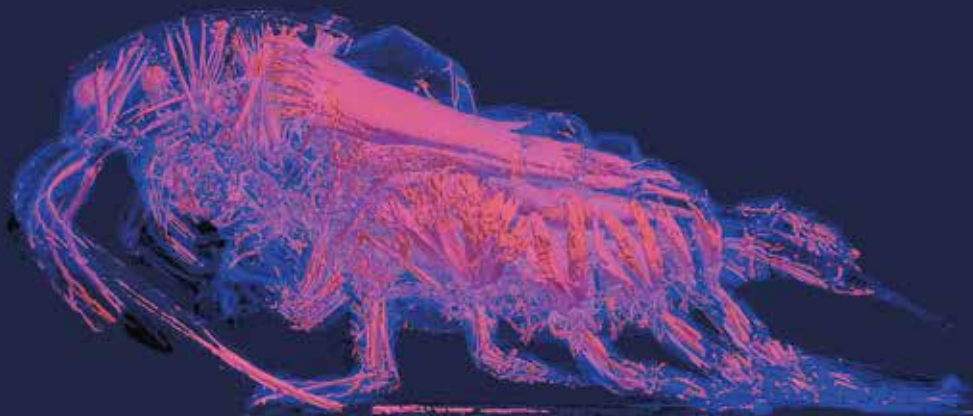
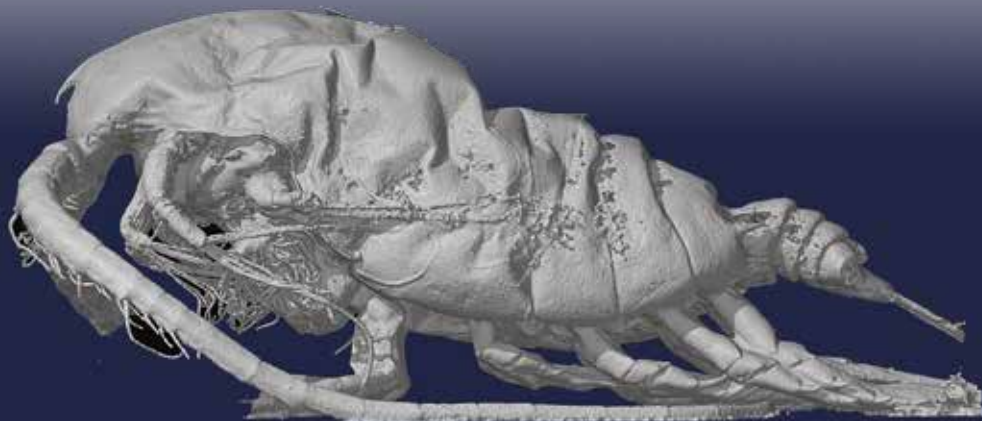


# omnivivdens

【オムニヴィデンス】



## カイアシ類 (コペポダ)

カイアシ類のカイは橈、すなわち舟のオールを意味します。これはエビやカニなど甲殻類の仲間で、その多くは1~2 mmほどの大きさのプランクトンです。海洋生態系は、一次生産者である植物プランクトンを動物プランクトンが食べ、それらが魚類などの高次捕食者の餌となる食物連鎖によって支えられてきました。ところが親潮域などの中高緯度海域では近い将来、著しい気候温暖化や海洋酸性化が予測されており、これらの海域における主要な動物プランクトンであるカイアシ類の種構成の変化や生産量減少、ひいては食用魚類生産量への負の影響が懸念されています。

上図は、北西太平洋で採取された標本の外殻(上段)、筋肉系・消化系(下段:赤色)を示しています。スケールは200  $\mu\text{m}$ 。

左図は腹側から見た頭胸部。前端から第1触角が長く伸び、短い第2触角、大顎・2組の小顎・顎脚からなる口器、殻内部にはそれぞれの付属肢と遊泳のためにカイ脚を動かす太い筋肉系が認められます。

## アンインテンディド・ジャーニー

スミソニアン自然史博物館と国連防災世界会議——震災被災地発見の旅

### 写真展「余儀なき旅路」

**アダム** 総合学術博物館の佐々木理先生から、この前のぼくたちの仙台訪問について語ってほしいと連絡があったんだけど。

**ジャシュ** そうだね。われわれは3月12日(金)から16日(月)までの4日間、スミソニアン自然史博物館と東北大学の連携事業の一環として仙台に招聘された。第3回国連防災世界会議の会期にあわせてね。これまでスミソニアンは総合学術博物館と連携してきた実績があったから、その先生方が労を執ってくれたわけだ。

**アダム** スミソニアンとしてはアンインテンディド・ジャーニー (Unintended Journey) という写真展を東北大学に持ちこむことにしたんだよね。

**ジャシュ** 知っての通り、この写真展は自然災害の被災と、そこから挫けず力強く立ち上がってくる人びとのありさまを伝える作品で定評がある「マグナム・フォト」という写真家集団のもので、まさに防災世界会議にはうってつけだったわけだ。

**アダム** 写真展はいちどスミソニアンでも開催して、それにあわせてワークショップをしたことがあるよ。ぼくはエドゥケーターだから、模型を使って子どもたちに自然災害の発生のしくみを実演したりした。複合的なイベントで、とても評判がよかったんだ。

**ジャシュ** それを再アレンジしたのが東北大学での写真展で、佐々木先生が「余

儀なき旅路」というすてきな日本語タイトルを考案してくれた。自然によってもたらされた、思ってもいなかった災害のために、住みなれた土地を離れて遠い場所にとどまることを余儀なくされている、というのがもともとの意味だからね。

### シュラインを訪ねる

**アダム** ぼくらの旅はアンインテンディド・ジャーニーじゃなかったね。

**ジャシュ** そうでもない。会期中に要人が来たら写真展の解説をしてほしいという要望はあったけれど、むしろ仙台を、東北を、被災地とそれに関係するさまざまな取り組みを自由に見て、それらが何であるかを知ってほしいということだったとおもう。予定調和でない、意図したものでない (unintended)、言ってみれば、われわれにとって発見の旅になったかどうかなんだ。

**アダム** ぼくたちは二人とも日本が初めてだったからね。先生はそのためのヒントをくれたということ?

**ジャシュ** まず、瑞鳳殿に連れて行ってくれただろう。シュライン (shrine: 社寺) に興味があると伝えたからだ。あれは江戸時代に仙台藩の初代藩主だった伊達政宗をまつた霊廟だということだ。政宗は日本の代表的なウォーロード (warlord: 戦国大名) のひとりだよ。

**アダム** そうすると400年前くらいかな。

**ジャシュ** 過去のことでなくて、その歴

史が現在に息づいているということが重要なんだよ。日本の人たちは気づかないかもしれないけれど、それはまちじゅうに溢れているといってもいい。いっしょにラーメン屋に行っただろ?

**アダム** ああ、ねぎ塩ラーメンがうまかった。

**ジャシュ** たしかに。いや、そうじゃなくて、店の前に白いキツネをまつた小さな社があったら。ビジネスのシンボルだということらしいが、そんなふうに伝統的なものが今の風景の中にとけ込んでるんだよ。

**アダム** そういえば、きみは文化人類学者だったね。

### 新しいものと古いもの

**ジャシュ** 話を戻すと、瑞鳳殿に登る表参道の石段は62段あるということだった。これは仙台藩の禄高62万石を表しているそうだ。Koku (石) というのは人間が1年間に食べる米の量で、約150キログラムにあたる。そうすると当時は単純計算で62万の人口をやしなう生産力があつたということになるね。これは相当なものだ。だから霊廟もこの上なく豪華につくられた。もともと、戦災で焼けて復元だそうだが。霊廟にはGokuraku (極楽) のようすをデコレートしてあつて、来世の思想もそこからよくわかる。印象的だったのは、大名の死にさいして殉死した家臣の石塔が廟の両側にいくつも並んでいたことだ。江戸時代には、あの世に行っても大名は大名だったんだ。



「余儀なき旅路」展を準備した佐々木理先生と



写真展を解説するジャシュ



瑞鳳殿表参道の石段



瑞鳳殿本殿正面のようす



歴史について説明を聞く

**アダム** 詳しい解説をありがとう。言ってみれば、仙台は Masamune の町だと今も意識されてるってことだね。数百年前と現在とが繋がってるってことか。

**ジャシユ** Dento (伝統) というのかな。カメラ店を覗いたときも、ストラップに Netsuke (根付け) という日本の伝統工芸品をつけたものがいくつもあった。最新の情報機器にこうしたものをつけるのが安心につながるわけだ。決して意識しているわけじゃないだろうけどね。新しいものと古いものが無意識に綱引きしてるんだ。

### なまはげの登場

**アダム** 伝統か。そういえばその夜、干し草をかぶって刃物と桶をもった怪物が出たね。ぎょっとしたよ。

**ジャシユ** Namahage (なまはげ) という神々の使いで、日本では悪を諷める Oni (鬼) だということだ。東北の秋田の風習で、その出身の佐々木先生が、あちこちの会場やイベントをまわっているパフォーマーを呼んでくれたそうだよ。だから本当

の怪物じゃない。

**アダム** そんなことはわかってるよ。あの風貌で何をされるかわからなかったから怖かったんだよ。

**ジャシユ** まさにそういうことだよ。それにしても、これほど豊かな異形のイメージが残っていることを知って感動したね。東北というのはそういう豊かな土地だということだ。

### 防災・減災教育の大切さ

**アダム** それからぼくは災害科学国際研究所の保田真理先生と打合せをした。保田先生は減災のための教育ツールを考案して、世界中を飛び回って子どもたちに語りかけている人だ。インドネシアでは津波の被害をむしろ忘れたがっているようにみえる。子どもたちに過去の経験を十分に教えていないそうだよ。正しい知識がなければ災害に正しく対応することはむずかしい。だから教育が重要なんだよ。

**ジャシユ** 保田先生はバンダナとか日本の風呂敷に、世界中どこでも理解できるよ

うな絵記号をプリントして教育ツールにするようだね。

**アダム** そうそう。身につけられるもの、ふだんから眼にするもの、それに、触った感触で覚えることが大事なんだ。

**ジャシユ** 総合学術博物館の人たちが開発した、ヘッドマウントグラスを使って3Dの震災遺構を体験するシステムも見た。

**アダム** リアルな体験だった。建物のようすだけでなく、震災直後の人びとの心の動きまでも記録されてるようだった。



保田真理先生と打ち合わせるアダム



なまはげに遭遇



3DMR システムによる震災遺構体験



荒浜地区で当時のようすを聞く



荒浜に住み続けることを望む人たち



松島海岸に佇む

## 荒浜・松島地区に入る

**ジャシユ** そうしてわれわれは、いよいよ津波の被災地に入った。仙台湾沿岸部の荒浜地区と松島地区だ。

**アダム** 街並みを抜けると、突然荒涼たる土地が広がっていた。あれには驚いたよ。

**ジャシユ** がれきをどけた後、更地にしたんだ。荒浜では海岸線から約4キロメートル内陸まで津波が到達したそうだ。小学校の廃屋を見ただろう？ あそこでは2階まで浸水した。当時たくさんの住民が避難していたのに、助からなかった人も多かったらしい。およそ800世帯が波にのまれたそうだ。しかし、がれきを屋根に載せたまま半壊した民家もまだ残っていた。

**アダム** あときは日本政府の要人が来てたせいか、残念ながら校舎には近寄れなかったけど、津波の脅威はあの場所にいるだけでもわかる気がした。

**ジャシユ** その後貞山運河をこえて、護岸工事の進む沿岸部まで行った。大きな女神(Goddess)の石像があって、そこに亡くなった人たちの慰霊碑があった。小川先生によればあれはKannon(観音)で、世界をあまねく見通して人びとを救済する仏教の存在だそうだ。そのすぐ側にはShinto(神道)の小さな祠がまつてあったのを見たから、いろいろな宗教に配慮しながら住民が建てたのかもしれない。

**アダム** 自然と、掌を合わせたい気持ちになったよ。

## コミュニティの分断

**ジャシユ** それから、その付近にプレハブを建てて集まっている人たちがいた。

**アダム** 黄色いハンカチをテント状に吊っ

てたね。

**ジャシユ** まるでチベットのタルチョー(祈祷旗)のようだった。登山前に安全を祈願して神々に捧げる五色の旗のことだよ。かれらはこの土地に住み続けたいとおもっている人たちだったが、行政がそれを妨げていると訴えていた。

**アダム** 今回の津波浸水域にはもう帰還できないということ？

**ジャシユ** 復旧の早い段階からその方向で話が進められていたようだ。しかし、家も財産も何もかもうしなつて、移住先でうまく暮らささいと言われても、それはとてもむずかしい。行政に対応して移住を了承したのは内陸側にあった新興住宅地の住民で、地域住民の総意をうけた代表ではなかったそうだ。先住の人たちは沿岸部に集中していたから、より大きな被害を受けた。それに高齢者ともなれば、資産価値の高い土地を買い直して新しい生活を始めるなんて、わずかな補償があったとしても、どう生活設計したらいいんだろうか。

**アダム** 経済的な問題が大きいということか。

**ジャシユ** そうではなくて、問題はコミュニティが安定的にもっていた構造を壊して住民を分断したことにある。再生する機会がうばわれたんだ。じつは最初にフィールドワークをはじめたのは、パプアニューギニアのアイタベ地区というところだった。そこは1998年に津波に襲われた沿岸部で、死者・行方不明者は2,200人をこえた。町の人口の約半分が犠牲になったといっている。2年後に現地入りしたんだが、土地の所有権の問題がおきていた。それまで土地は集団的にゆるやかに所有していたものが、防災上の集団移転や畑作地の開墾が進むにつれて、その利益を

誰がとるか、という問題が起ってしまった。貧しい人たちはまた沿岸部に戻っていった。

**アダム** そんなことがあったんだ。

**ジャシユ** 防災を錦の御旗にしても、人びとの生活のあり方までは決定できないということだよ。安全のためといたって、無人の野をつくってそれを平和と呼んだ、どこかの民族のようじゃないか。

**アダム** 言ってみれば、人工的に辺境をつくらうとしているということかもしれないな。

## 災害を乗り越えて

**ジャシユ** それで、つぎに松島地区に行った。日本有数の観光地だそうだ。

**アダム** 美しい島々に、政宗の菩提寺もあって、日本の伝統美を感じる場所だったね。

**ジャシユ** 湾に小島が点在する地形のおかげで、一般には被害が比較的小さかったといわれているようだけれど、それでも津波は胸の高さまで来たそうだ。美しく感じるのは復興の努力の結果なんだろう。当時は百数十人の観光客がいたが、急いで避難を呼びかけたために一人の死傷者もださなかったらしい。アメリカ人の観光客から命を救ってくれてありがとう、という手紙が届いたそうだよ。

**アダム** 災害を乗り越えて、人と人との新しい結びつきができたわけだね。

\*

**ジャシユ** どうだ、話してみると今回の旅ではいくつも発見があっただろ？

**アダム** たしかにそうだね。ほくを誘ってくれたスミノニアン知念淳子さんにも、総合学術博物館の先生方や同行してくれた人たちにも改めて感謝しないとね。

(文/構成/写真=小川知幸)

## 新教授・新助教ごあいさつ



東北大学  
学術資源研究公開センター  
(総合学術博物館) 教授

**藤澤 敦**

PROFILE

(ふじさわ あつし)  
出身：京都府  
専門：考古学

2015年4月1日付で柳田教授の後任として赴任しました。それまでは東北大学埋蔵文化財調査室で、大学構内の遺跡を調査研究する仕事をしていました。博物館に協力したこともあり、ニュースレターにも何回か登場しています。

専門は考古学で、日本の古代国家形成過程にあたる、古墳時代から奈良時代にかけての時期を中心に研究しています。とくに日本古代国家の周縁地域にあたる東北地方をおもな対象として、中央からだけの視点ではない、新たな日本列島の歴史を復元したいと思っています。そのため考古資料の分析はもちろん、文献史学

の研究成果、文化人類学などにおける「民族」や「人種」概念の問題なども取り上げてきました。古代の東北地方、とくに北部を中心とした地域の人びとは、中央政権から「エミシ」と呼ばれ異なる人間集団とみなされました。しかし、考古資料から見た文化の違いと、文献史料から復元された人間集団の境界は、相当にずれるのです。異なる文化や人間集団が交錯する周縁地域においては、地域の具体的な様相の分析から、文化と人間集団の関係という普遍的な問題を考えることができます。

前任の埋蔵文化財調査室では、専門分野以外のさまざまな研究もおこなってきました。青葉山地区などには旧石器時代や縄文時代の遺跡があります。川内地区は江戸時代の仙台城二の丸と周辺の武家屋敷にあたります。これらの時代の調査研究も、当然ながらおこなわねばなりません。とくに川内地区の調査では、膨大な量の江戸時代の遺物が出土し、その種類も多様です。東北地方では、江戸時

代の考古学的研究は始まったばかりでしたので、手探りで新たな資料と格闘することとなりました。

多様な出土遺物のなかには、脆弱な木製品など、保存処理を施さないと壊れてしまう遺物もたくさんあります。その必要に迫られ、保存科学の研究にも取り組むこととなりました。出土遺物の材質分析を、工学部の先生方と共同でおこなったこともあります。レーダーなどの物理的探査方法で地下のようすを探る遺跡探査の研究にも協力してきました。

東北大学という総合大学に置かれた当博物館は、異なる専門領域の研究者が共同でさまざまな課題に取り組むことができる場です。東北大学で蓄積された資料標本は、本学における長年の知的営為の結晶です。その資料標本を通じて、さまざまな人や組織や研究をつなげ、あらたな知的営為をひらいていくことができればと考えています。



東北大学  
学術資源研究公開センター  
(総合学術博物館) 助教

**黒柳あずみ**

PROFILE

(くろやなぎ あずみ)  
出身：静岡県  
専門：微生物学

2015年4月1日より総合学術博物館の助教として着任しました。本学卒業後は関東にいまして、こちらに赴任する前は東京大学大気海洋研究所で、どちらかといえば現在の海の環境をメインとした研究をしていました。このたびは幸運にも貴重な標本試料が多数保管されている本博物館に来ることができましたので、今後は化石試料を用いた研究も積極的に進めたいです。

博物館活動に関しましては、まだ周囲の皆さんに教えていただくことばかりですが、今後は地球科学になじみのない方に

も、その魅力を感じていただける機会が提供できるよう、精進して取り組んでいきたいと思っています。これからどうぞよろしくお願いたします。

私は浮遊性有孔虫という生物を使い、昔や今、そしてこれからの海の環境の研究をしています。浮遊性有孔虫というなじみがない名前ですが、沖縄のおみやげでよく知られている星砂の仲間です(ホシズナは底棲有孔虫です)。有孔虫はとても小さな(多くは1ミリの半分以下)プランクトンですが、私たち人類が生まれる前からの、過去のさまざまな海洋環境を記録しているのです。

たとえば、恐竜がいた白亜紀の地球の海水温やその海の環境について調べるためには、どうしたらよいでしょうか? そんなときによく使われる方法のひとつとして、「当時の海洋に生息していた生物を使う」ということがあります。しかし生物といっても、恐竜では地層からすぐ発見されることは稀ですし、場所や時代も限られてしまいます。

そこで、現在までずっと分類群が継続しており(もちろん現在と昔の種類は少し違いますが)、どこの海にでもよく見られて、サイズが小さくて数も多いプランクトンを使うと都合がよいのです。一般にプランクトンといっても、固い殻を持たないものは化石として残りにくいので、昔の環境を考えると殻を持つ浮遊性有孔虫のようなプランクトンを使います。この化石の有孔虫の種類を調べたり(暖かい海水を好む種類かそれとも冷たい海水か)、その殻の化学分析などをすると、その当時の海の水温やpHなどの環境を知ることができます。

本博物館の微化石コーナーでは、白亜紀の浮遊性有孔虫の、手のひらサイズの精密な模型が展示されており、また実際の顕微鏡で化石標本を観察することもできます。化石だけでなく、現在の海にいる有孔虫の3D大型模型もありますので是非ご覧になってください。丸々とした形が意外と可愛いですよ。

## ミュージアムの種を播く（後編）

### 現代社会の創造的破壊の装置としてのミュージアム

**編集部** 前号(No. 47)では、「南三陸フィールドミュージアム」は、ミュージアム誕生の実証実験であったというお話でした。その場合のミュージアムとは施設ではなく、ひとつの「しくみ」だとのことですが、続きをお聞かせください。

**佐々木** スミソニアン博物館はご存じですね。あの博物館がなぜあそこにあるとおもいますか。

**編** アメリカ合衆国、ワシントン DC のナショナル・モールの広場のなかですね。東の端に国会議事堂があって、西の端にリンカーン記念堂がある。スミソニアンはその中間に位置しています。

**佐** そうです。アメリカ合衆国は、博物館を政治の中心にしているということです。

#### 民主主義、コギトー

**編** つまり、知識の独占を許さず、広く国民に開放するということでしょうか。民主主義の基本的な考え方ですね。

**佐** というよりも、健全な社会をつくるためには博物館に行くことが必要不可欠だと考えているということです。

**編** どういうことでしょうか。

**佐** 現代はデカルトから始まっているとおもいませんか。

**編** いきなり形而上学ですね。「方法的懐疑」ということですか。疑いようのないものがコギトー（われ、おもう）という。

**佐** そうです。現代社会にあるのは、純粋にメソッド（手法）だけだということをしめたのです。外部に何か規範があるわけではない。それに従うというわけでもない。これをおそらくイスラムは承服しないでしょうが、ヨーロッパが中世の歴史のなかで、ルネサンスをつうじて見つけたものなのです。

**編** コギトーと博物館はどのような関係にあるのですか。



南三陸フィールドミュージアムのチラシ

**佐** 現代社会には絶対的な規範は存在しません。当たり前だとおもっていても当り前のものはない。もしそうしたものが存在するとおもってしまったら、社会は停滞して死滅します。だから博物館に行って、これまでとは違う、何か新しいものをつねに発見していくことが、社会が健全であるために必要だと考えられているということなのです。

#### 発見という体験

**編** 現代社会を相対化することは、とくに社会科学に課せられた責務でもあります。その学問的成果を人びとに還元することではいけないのですか。

**佐** それは「知識」なのです。発見するという体験がともなわなければ意味がない。コギトーというメソッドをつうじて、一人ひとりが発見することです。そのような体験こそが「ミュージアム」なのです。

**編** ますます訳がわからなくなりました。知識欲とは人間にとって大きなものでしょう。たとえば、寺田寅彦は「科学者とあたま」というエッセイで、科学を恋にたとえています。科学者になるには自然を恋人としなければならない。自然はやはりその恋人にのみ、まごころを打ち明ける、うんぬん。恋とか愛だとかいえば、人間の本源的な欲求のような気もしますが、そうではないと。

**佐** 寺田寅彦はロマンチストだからでしょう。生まれもつての欲求ではないのです。何かのきっかけでそうなる。それに、この体験はもっと大きなものです。人間が変わってしまうような。昨日までの自分とは断絶してしまうような、一種の破壊的な体験です。これをみんながやったら危なくなる。(笑)

#### 創造的破壊

**編** たしかに、「知ることは変わることであり」という格言を聞いたことがあります。強烈な体験だということですね。逆にいえば、つねに発見するということは、つねに破壊することでもあるわけで、喜びだけでなく、不安をとまうのではないですか。

**佐** その通りです。破壊のなかから新しいものが生みだされる。そんなことは、それほど多くの人ができるわけではありませ



“一人ひとりの発見の体験こそが  
ミュージアムなのです。”

ん。しかし学芸員であれば、それを日常的に自らに課さなくてはなりません。そうして新しいものを見せていくのですから。そして、社会のなかの多数派は、少数派からそのようなものが現れることを期待している。

**編** 民主主義というわけですね。つまり多数決原理。少数派は多数派に従わなければならない。多数派は少数派を尊重しなければならない。

**佐** そうではなくて、多数派は自分たちが正しいわけではない、ということを知っているんです。

**編** 今そのようなことを言いました。民主

主義は、その決定が正しいか間違っているかということ、そもそも問題にしている。

### 装置としてのミュージアム

**佐** そうです。多数派は、少数派のなかから新しい価値が生まれるかもしれないということを前提にしている。そしてそれが今度は多数派になるかもしれない。そのようにして、社会は健全さをたもっていくわけです。その根底には現代社会の不安がある。

**編** なるほど、現代に産み落とされて、人間は後天的に、「発見」という体験を

喜びとするようになった、と。

**佐** 博物館、あるいはミュージアムは、いわばその創造的破壊を効果的におこなうことで、現代社会を救済する一種の「装置」になっているのです。だから政治の中心に、言いかえれば、根幹にあるものなのです。

**編** それで、「しくみ」とおっしゃった理由なんですね。ありがとうございました。

今回の「南三陸フィールドミュージアム」の試みが実を結ぶことを祈っています。  
(完)

(文／構成＝小川知幸)

## 博物館の魅力 —— データベース作成補助

わたしが総合学術博物館の学生スタッフとして働き始めたのは2014年の3月からで、卒業する先輩の跡を継ぐかたちで始まりました。

おもな作業は、標本館にある膨大な数の貴重な標本を整理し、データベースを作成することです。当館には、展示されている標本だけでもかなりの数がありますが、じつはバックヤードにはその何倍もの標本があり、それらにはラベルがつけられて箱に入って眠っています。しかし、帝国大学時代から長い間をかけて収集された標本たちのなかにはラベルが朽ちかけて読めなくなっているものや収納場所が無秩序状態になってしまったもの、そもそもまだ整理されていないものなどが多くあります。わたしの仕事はそのような標本たちの情報をできるかぎり読み取り、データベー

スに書き起こしていくというものです。

作業はまず標本箱の中を見るところから始まります。開けてみるまで何が入っているかわからないので、宝箱を開けるようなワクワク感があります。そしてひとつひとつの標本を手に取り、それが何の標本なのか、産地はどこか、採集者は誰かなどの細かい情報を拾い出していきます。すんなり分かることはほとんどなく、たいていは殴り書きされていて読み取りにくかったり、インクが色あせて消えかけていたり、そもそも紙がぼろぼろで読めなかったりと大変なことが多いです。

その代わりに、この作業はときどき面白い発見があるのでとても楽しい仕事でもあります。たとえば、とてもめずらしい標本や変わった標本、きれいな標本が出てきたり、現在の東北大学の先生たちが学生の頃に

採集した標本が出てきたりといったことがあります。最近では標本が採集された当時(1937年頃)の手帳や手紙が入っていて、断片的ではありますが当時の生活などを読み取ることができました。このような面白いものを見つけることができるのは、バックヤードを知ることができるスタッフならではの楽しみです。

このような発見は、博物館を見に来て下さったお客さまには体験してもらうことができません。そこでわたしたちが見つけた面白いものの中から展示企画を作ることも考えています。常設展で展示されている標本はもちろんですが、裏側に眠っている標本たちの魅力も発掘し、皆さまに伝えていけたらいいと思います。

(文／写真＝三浦真実)



世界の巨大豆コレクション



中国ラストエンペラー旧蔵品と伝えられる古代の布銭



整理作業中の筆者

# 東北大学総合学術博物館 Information



## SMMAクロスイベント

### 「みんなでどろんこ! 生きもの観察 in 地底の森 2」開催のお知らせ

自分たちの住んでいる場所に、見えていなかったもうひとつの世界があることを学んでみませんか? 東北大学総合学術博物館×地底の森ミュージアム×みちのく博物楽団のタッグで昨年開催して好評だった標記のイベントを今年も9月下旬に開催予定です。

地底の森ミュージアムの地下にある2万年前の遺跡を見学したあと、野外展示「氷河期の森」にある池で生きものを採集して、みんなでじっくり観察します。

詳細は「仙台市政だより8月号」、ポスター、チラシ等でもご覧いただけます。イベントについてのお問合せは、下記、地底の森ミュージアムまでお願いいたします。

■地底の森ミュージアム  
(仙台市富沢遺跡保存館)

TEL: 022-246-9153

FAX: 022-246-9158

E-Mail: t-forest@coral.ocn.ne.jp



(イラスト=須田祐子)

## 理学部自然史標本館

### ●ご利用案内

総合学術博物館の常設展示は理学部自然史標本館にて行っています。下記は理学部自然史標本館のご利用案内です。

### ●入館料

大人150円/小・中学生80円  
(団体は大人120円、小・中学生60円)  
幼児・乳児は無料、団体は20名以上です。

### ●開館時間

午前10時から午後4時まで

### ●休館日

毎週月曜日\*1、  
お盆時期の数日\*2、年末年始\*2、  
電気設備の点検日(例年8月最終日曜日)\*2

\*1 月曜日が祝日の場合は開館、祝日明けの日が休館となります。

\*2 日にちが確定次第ホームページにてお知らせします。



### ●交通手段

#### ■仙台市営バス

- (1) JR仙台駅西口バスプール9番のりばより、[719系統](青葉通・理・工学部・仙台城跡跡南経由 動物公園循環)に乗り、「理学部自然史標本館前」で下車。徒歩1分。所要約20分。
- (2) または同じく9番のりばより、[710系統]か[713系統]、[715系統](宮教大、青葉台、成田山行き)に乗り、「情報科学研究科前」で下車。徒歩4分。所要約25分。

#### ■仙台市観光シティーバス「ふるふる仙台」

JR仙台駅西口バスプール15-3番のりばより乗車。「理学部自然史標本館前」で下車。所要約30分。

## 総合学術博物館の ホームページもご覧ください



東北大学総合学術博物館のホームページ  
<http://www.museum.tohoku.ac.jp/>

## 東北大学 総合学術博物館 THE TOHOKU UNIVERSITY MUSEUM

〒980-8578  
宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉6-3  
tel/fax. 022-795-6767  
©The Tohoku University Museum

## Omnividens

[オムニヴィデンス]

Omnividensはラテン語で、英語のall-seeingに相当し、「普く万物を観察する、見通す」の意味をもっています。